

北大図書館の写真コレクション

北海道大学附属図書館北方資料室には、明治初年から大正期にかけての北海道の写真が多数保存されている。その多くは、当時の北海道の行政機関であった開拓使及び北海道庁が、開拓事業の進展を記録するために撮ったものである。ただ、開拓使廃止から北海道庁設置までの三県時代（明治 15.2～19.1）の写真は、北海道事業管理局（農商務省所管）関連のものを除きほとんどみられない。これらの写真は、主として昭和 12 年（1937）北海道大学に「北方文化研究室」が設置された際に、多数の資料とともに北海道庁から寄託を受けたものである。それ以外にも「札幌農農所屬博物場」の印を押した開拓使時代の写真が数多く重複して残されているが、それらは明治 17 年（1884）に札幌農学校がこの博物場（現在の農学部附属博物館）を北海道事業管理局札幌農業事務所から引継いだ折に移管されたのであろう。当時そこには開拓使所蔵写真の残部がまとめて保管されていたものと思われる。

上記のように明治大正期の地方行政機関がその管轄する地域について長年にわたり写真の記録を撮り続けたことは、日本写真家協会などによれば他府県ではみられなかったことで、それは北海道の特徴であったといえそうである。そのことは、明治初年にわが国に残された唯一の未開地北海道の開拓過程を記録することのほかに、特別な行政的必要性があったことを推定させる。まず考えられるのは、各省と同格におかれていた開拓使では長官（次官）の黒田清隆が東京出張所に常駐していたので、札幌と密接な連絡を必要としていたことである。北海道各地の開拓事業の成果を東京に報告するのに写真はもっとも具体的で分かりやすい手段であり、それはハイカラ好みの黒田の趣味にも合っていたであろう。さらに開拓使は太政官に写真を提出して、政府の要人たちに北海道開拓を宣伝したことも考えられる。北海道庁の場合は府県並みの地方行政機関となったが、拓殖事業計画などによって他府県とは異った予算措置を受けていたので、種々の機会に開拓使以来の伝統的手段を利用したことがあったかもしれない。

明治 30 年代以降になると、北海道庁は拓殖事業の現況を紹介し、移住者の

来道を促進するために種々の出版物を刊行し、その中で写真の利用を始めている。とくに注目されるのは北海道庁拓殖部（当初は殖民部拓殖課）が編集し、北海道協会によって刊行された「殖民公報」という隔月刊の雑誌である。明治34年3月から大正10年10月まで継続した（通巻123号）この雑誌は、拓殖全般にわたる詳細な情報のほか毎号4～6枚ほどの口絵写真を解説付きでのせていた。これらの原写真も北方資料室には数多く所蔵されている。そのほか大正初年から北海道庁によって始められた『北海道史』編纂の際に、多数の写真が収集あるいは複製され、また新たに撮影されている。その折に作成されたのが、印画紙写真約700枚を貼付した豪華なアルバム『北海道史資料写真帖』全8巻である。昭和初年の『新撰北海道史』編纂の際には、絵はがきの収集も行なわれている。

この目録には、以上のような写真や絵はがきのほかに、開拓使仮学校、札幌学校、札幌農学校以来の北海道大学沿革写真（但し北海道帝国大学時代まで）も含めることとした。写真好きの開拓使の影響のせいか札幌農学校も早くから折々に写真を残しており、それはその後も受継がれたので、北大沿革写真は他の学校にはみられないほど豊富な内容となっている。その一部は、北海道大学創基100周年に際して刊行された『写真集北大百年』のなかで利用した。北大個有の写真としてはそのほかにも篤志者から寄贈を受けた多数の写真があり、その中ではブルックス（札幌農学校教授）、大島正健（札幌農学校第1期生）、宮部金吾（同第2期生）のコレクションがとくに貴重である。近年でもしばしば北海道関係写真の寄贈があり、また個人や機関所蔵の写真を借用して珍しい写真の複写が続けられている。

このようにして形成された北大図書館の写真コレクションの価値はすでに全国的に知られており、アメリカで開催された国際写真史学会の大会で紹介されたこともある。幕末明治初年に横山松三郎、木津幸吉、田本研造、武林盛一らの草分け的な写真家たちを生み出した北海道は、長崎・横浜と並んで日本における写真の発祥地の一つとされており、とくに明治初年の写真は写真史的にも注目されているのである。それゆえこれらの写真の利用も単に北海道内にとどまらず、全国のマスコミ、出版関係その他からの利用依頼が引きも切らぬ状況である。とはいえ、従来この写真コレクションの全貌は必ずしも知られているとはいえず、特定の写真のみがくり返し利用されているのが実情である。北方資料室ではこれまで地域別、年代順に排列した写真の仮目録によって利用者

の依頼に対処してきたが、このたび新たに写真目録を刊行することにしたのは、利用者自身による写真選択の可能性を拡げることを期待したからである。そのためこの目録では地域別の中をさらに項目によって細分し、写真の選択を容易にするよう努めた。もっともこの目録だけで写真のイメージが分るわけではないので、将来この目録に対応する写真帖ができれば利用はさらに便利になるであろう。

写真の頻繁な利用とともに懸念されるのは原写真保存の問題であるが、北方資料室ではすでに10年以上も前に大部分の写真の6×7ネガ・フィルム作成と6ツ切版の複製を完了しており、利用は複写写真によることにしている。但し原写真からの複写を希望する人のためには、ネガ・フィルムからの引伸しも可能である。

この目録では印画紙写真のほかに写真帖や絵はがきのリストを附録としてつけ加えたが、それは明治前期にウェイトをもつ北大図書館写真コレクションの不足を補うためである。写真帖や絵はがきにも珍しい写真が少なく、とくにコロタイプ印刷のものは印画紙写真と違って退色のない鮮明な写真が多い。それらの利用を容易にするために、ここでは内容細目が付されている。さらにこの目録には、大正初年に北海道史編纂掛が撮影した文書、書画、出土品、記念物その他の歴史資料の写真も収録した。それらの一部はすでに『北海道史』や『新撰北海道史』の中で利用されているが、今後の歴史書にとっても利用価値が高いであろう。

北方資料室にはこの目録に収録した以外にも多数の写真を所蔵している。その一つは疋田豊治氏（もと北大水産専門部、函館高等水産学校、北大水産学部教授）が明治末から昭和17年にかけて撮影された5,000枚以上のキャビネ版ガラス乾板（北大水産学部水産資料館蔵）からの密着焼付写真である。その半ばは魚類標本写真であるが、他は学内写真のほか練習船忍路丸や漁船等で訪れた各地の写真で、千島列島や樺太、満州などの写真も含んでおり、撮影年月日や撮影場所が明記されている。そのほか『写真集北大百年』編集の際に収集した多数の複写写真があるが、それらはここに収録した一部を除き未整理である。

最後に、日頃から古写真について種々の御教示をいただき、写真情報の提供や借用写真の複写などのために協力を惜しまれなかった札幌在住の写真史研究家渋谷四郎氏および桑嶋洋一氏に厚くお礼を申し上げたい。（秋月 俊幸）

凡 例

1. 本書は、北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の主として明治・大正期の北海道関係写真の目録である。そのほか補足資料として写真帖や絵はがき（昭和20年以前に発行のもの）を附録として追加した。
2. 写真は地域によって分類し、その中にはいくつかの事項を立てグループごとに撮影の年代順に排列した。アイヌ民族写真、人物写真、資料写真等は独立の項目とし、北海道大学の沿革写真も「附録Ⅰ」として別立てとした。
3. 写真の記載は、写真名・備考（*）・年代・サイズ（縦×横 cm）・写真の種類・撮影者（他）・請求記号の順に記し、一覧表とした。
4. 写真名は、撮影当時につけられたものはなるべく尊重するよう努めたが、不適当なものや後人によって付されたものは、適宜修正した。
5. 写真の年代も不確かなものが少くないが、なるべく時期を確認するように努め、（?）や「頃」をつけて推定したものがある。
6. 写真の種類は、撮影当時のものを「原」、のちに複製されたものを「複」で区別した。印画紙の種類は「鶏卵紙」*と「POP」**のみを記したが、判別の間違いもあると思われるので専門家の指摘を俟ちたい。
7. 原写真の撮影者は「写真館（地名）」によって示したが、武林写真館については「三嶋常盤製」の表示のあるものを「三嶋（札幌）」と記した。また、撮影者が写真史上著名な場合は氏名を記したのものがある。複製写真の場合は写真館名を丸括弧で囲んだ。
8. 請求記号のうち「道史」とあるのは『北海道史資料写真帖』の略、また「写真帖」とあるのは下記でいう「原写真アルバム」のことである。
9. 写真帖は、印画紙写真を貼付した「原写真アルバム」と「印刷アルバム」を区別し、前者に含まれる写真は普通の写真と同様に扱い、各分類・項目中に分出した。印刷アルバムについては「付録Ⅱ」において各冊ごとに内容細目を記し、検索の便利のため各写真に一連番号を付した。
10. 絵はがきは「付録Ⅲ」において袋ごとに内容を記したが、袋がなくなつてばらになったものは、類似のものをまとめた場合がある。
11. 上記の「印刷アルバム」や絵はがきのキャプションにおける旧漢字は、原則として常用漢字に改めた。
12. この目録の編集は、秋月俊幸と吉田千萬が担当した。

* 鶏卵紙 (Albumen paper) 塩化アンモニア水、硝酸銀、硝酸ソーダなどのほか卵白液を使用した印画紙で、ネガを密着して日光にあてると画像がでる。19世紀中頃イギリスで開発され、わが国でも明治初年から20年代末まで印画紙の主流であった。写真は落葉色もしくは幹色味を帯びる。

** POP印画紙 (Printing out paper) 塩化銀ゼラチン乳剤を塗布した印画紙。やはり日光で現像するが写真には強い光沢があり、普通はセピア色を帯びる。1882年イギリスで開発され、わが国でも明治20年代末から大正中頃まで広く使用されたが、とくに明治30～40年代には鶏卵紙に代って印画紙の主流となった。